

アクティブ・ラーニングの1技法

～「ドラマエンパワメント」の提案～

堺市立旭中学校 校長 川井 さゆり

1. はじめに

次期学習指導要領のキーワードとして「アクティブ・ラーニング」が注目されている。この「新しい学びのスタイル」をどう実践していけばよいのか。教育現場においてもさまざまな研修が始まっているが、今回の「アクティブ・ラーニング」の特徴は、学習システムの改革に大きな焦点があたっているのだと考えるべきである。文部科学省が出した「論点整理」には、単に特定の型を導入するという発想ではなく、「学び全体」を改善するという見方が必要だと述べられている。

「アクティブ・ラーニング」というと、プレゼンテーションやディスカッション、ディベートなどが具体的な形として挙げられるが、「学び全体」の改革という点から、基本部分の理解からまずアクティブにとらえ、既成の技法でない新しい発想の学習スタイルを取り入れるべきであろう。

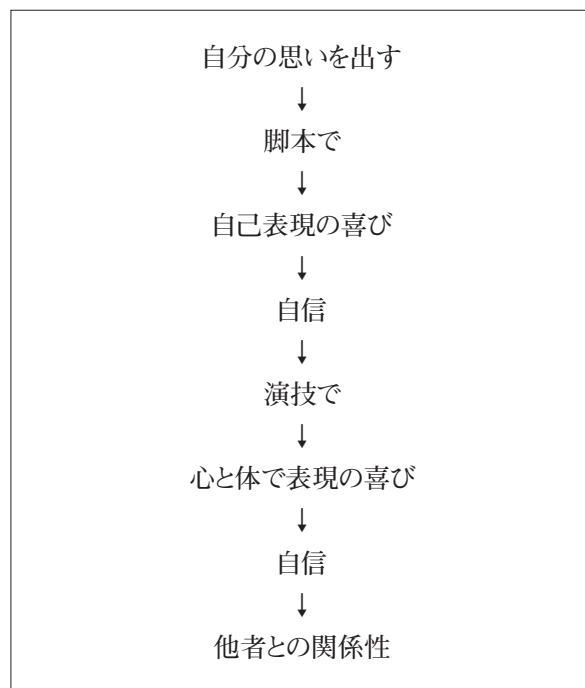
子どもがアクティブに能動的に学ぶためには、自尊感情が大切にされ、自己肯定感が高まっている環境がまず必要である。逆にいうと、そういう状況が設定されていない中で、子どもが真にアクティブになり能動的な学びの姿勢をもてるとは思えない。実際に、自尊感情や自己肯定感が高いほど自分自身のために学習しようという動機づけが高くなるということがさまざまな調査結果に表れている。私が作成したワークショップ「ドラマエンパワメント」は、子どもの自尊感情や自己肯定感を高め、子どもをエンパワメントさせながら、学習を進めていくことができるものである。「アクティブ・ラーニング」のための1技法として、既成のものではない新しい学習スタイル「ドラマエンパワメント」を提案するために、私自身が現在の勤務校（堺市立旭中学校）で、国語教師として学級担任として、実践してきた取り組みを報告する。

2. 「ドラマエンパワメント」とは…

私は長年、演劇部顧問として、生徒と「劇づくり」に取り組んできた。旭中学校では、管理職になるまでの9年間演劇部顧問を務めた。旭中学校には家庭的なことで課題を抱えた生徒が多く、さまざまな調査で「自尊感情の低さ」が表れている。演劇部員の中にも、演劇

部以外の場では、「自分に自信がもてない」「自分を出せない」という生徒が多かった。しかし、生徒の劇の発表を観にきた担任の先生が、生徒の姿が日頃と違い、大変いきいきしているのに驚かれることがよくあった。これが演劇のもつ力である。演劇は、自分自身を解放することから始まる。演劇の世界以外では、「自分を出しにくい」生徒が、演劇をしたいと思う理由には、自分を解放したいという願いがあるからだろう。舞台上での表現を通してだけでなく、自分の思いを表現できる「脚本づくり」を喜ぶ生徒がいるのもその理由と考える。「脚本づくり」を通じて、自分の思いを表現し、それを舞台で体現し、観たものから拍手を得ることで、自分自身の自信へとつながっていくのである。これをフローチャートにすると、下のようになる。

【フローチャート】



演劇を通じて、自身がエンパワメントし、他者との対話ができ関係性がよくなり、学習を含めたいろいろな場面で力を伸ばしていく姿を、私は多く見てきた。演劇は自尊感情の低い子どもたちを、エンパワメントさせる力をも

っている。自分の力＝総合的な学力が伸長していくといっても過言ではない。

演劇はまさに、文部科学省が「アクティブ・ラーニング」として定義する「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法」である。

この演劇を教育に積極的に取り入れられないかと考え作ったのが、ワークショップ「ドラマエンパワメント」である。

作成後、子ども対象と教職員を含めた大人対象に実践を重ね、その有効性については実感している。以下に、その具体的内容を記す。

「ドラマエンパワメント」の内容

その①《まずは心をリラックス》

「感情表現ワークショップ 4つのバイバイ」

資料1参照

下記の1～4のどれか一つを選び、その状況の気持ちになり「バイバイ」を言う。言われた相手は、言った人が1～4のどの状況で「バイバイ」を言ったかを想像し答えるというゲーム方式のワークショップである。

このワークショップは、「気持ちを表現することや「人の気持ちを、言葉だけで理解するのは難しい」を知ることがねらいである。言葉だけでなく話し手の表情や雰囲気、人の気持ちを理解していく必要があることをわからせたい。ゲーム感覚で楽しみながらこのことが理解でき、「ドラマエンパワメント」のアイスブレイキングの役割にもあたるものである。

資料1

- 1 友達といっぱい遊んだ、また明日ね
- 2 大好きな友達が転校する
- 3 久しぶりに会った田舎のおばあちゃん
また来るね
- 4 かわいがっていたペットが死んじゃった

その②《ひとりで考えてみよう》

「ある会話」

資料2参照

次に、与えられたテーマで脚本を作る。脚本と言っても時間上の制約もあるので、「短い会話」のせりふを書いていくレベルである。「書く

という作業を通じて自分の思いを見つめることができる。ラストのせりふは、前向きな思いになるせりふをあらかじめ設定しておく。これは、学習者の自尊感情や自己肯定感を高めるために必要なことである。この気持ちをもつことで、学習者は自分が作成した脚本を他者に発表したい(表現したい)という気持ちになる。

資料2(実際に使用する脚本用紙)



その③《他者へ表現する》

「発表」

二人組(ペア)なり、お互いに自分が書いた脚本を発表しあう。最後には必ず拍手をする。この拍手により、自尊感情や自己肯定感が高まり、さらに学習の達成感も得られる。

その④《全体で共有しよう》

二人組(ペア)での発表を通して、生徒はエンパワメントしている。「自分の脚本を、全体場で発表したい人いますか?」と尋ねると、かなりの人数が挙手をする。「アイスブレイキング」や活動その①～その③の過程があるから、全体での発表がスムーズになる。時間の制約もあるので、全員の発表は無理だろうが、できるだけ多くの生徒に発表をさせたい。

以上が、ワークショップ「ドラマエンパワメント」の内容である。

3. 具体的な授業実践

「ドラマエンパワメント」の具体的な授業実践の中から、いくつかのパターンを紹介する。

①中学校「道徳」

主題「いじめについて考える」

教材名「いじめはダメ!

いじめを受けている友達に対する言葉を考える」

【友だち(A)の元気がない。私(B)がどうしたの?と声をかけると、同じ学級の何人かに嫌な事を毎日言われていて、学校に来るのが嫌になっているという。友だち(A)に元気になってほしい。どんな言葉をかけたらいいかな?】

A	もう学校に来るのが嫌になってきた…。
B	(ここにせりふを書く)
A	〃
B	〃

【略】

A	〃
B	〃
A	ありがとう。がんばってみるわ。

「ひとりで考えてみよう」での脚本づくりは、大変意欲的に取り組み、あっという間に仕上げってしまう生徒もいた。なかなか進まない生徒もいるが、何度も書き直しをするなどしており、いじめ問題に真剣に向きあおうとする態度が見られた。「他者へ表現」をするペアでの発表では、恥ずかしがるペアもあったが、声の調子を工夫するなど、こちらが指示していないところまで工夫するペアもある。生徒の感想では、「脚本をかくことで、いじめについてしっかり考えることができた」「いじめを自分に結び付けて考えた」「発表を聞いて、他の人の気持ちがわかった」という意見が多かった。学級の中で、自分をうまく出せないタイプの生徒が、意欲的に取り組み、自分の気持ちをしっかりと脚本に書いていた。その後、過去に受けたいじめの体験や「いじめは許せない」という思いを、自ら担任に打ち明けに来た。エンパワメントし、他者との関係の中でその力が発揮できている。道徳教育は、「自分自身」「人とかかわり」「集団や社会とかかわり」を内容とする教科であることから、この学習スタイルは大変有効だと考える。

- ②中学校「保健教育」
 主題「喫煙防止」
 教材名「たばこはダメ！
 友達からたばこを進められたときの断り方」

ミチは、わたしにたばこを勧めてきた。

ミチ	ためしてみる？
わたし	たばこを吸うん？やばいで。

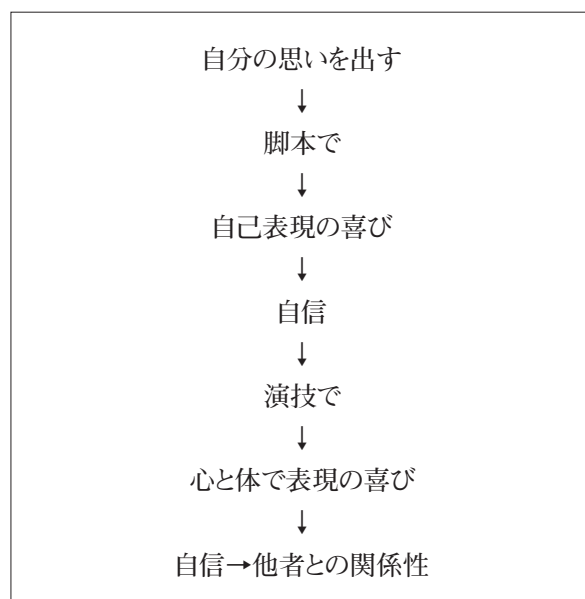
さらに、ミチは次のように言ってきました。あなただったら、どうしますか？

ミチ	だれも見てへんって。こわいんか？
わたし	(ここにせりふを書く)

この他、いくつかのパターンの声かけに対する断り方を考え、この会話をもとに脚本を作り、「他者への表現」として発表をする。発表場面では笑い声が聞こえるなど、明るい雰囲気での学習が進む。深刻に受け止めるべき内容であるが、みんなで明るく考える雰囲気もよいと思う。学級全体が一体化した中で、喫煙拒否の意思表示することは、何よりの喫煙防止教育となる。

この指導は養護教諭が中心となり行い、「ドラマエン

パワメント」の脚本の形とは少し違うが、



という流れで行っている。旭中学校で、毎年1年生で実施している学習として紹介する。

【発表のようす】



- ③中学校 「国語」
 主題「登場人物の心情理解」
 教材名「少年の日の思い出」
 (光村出版・「1年国語」教科書より)
 「母への告白内容を想像してみよう」

【「少年の日の思い出」のラストの場面を想像させる。小説の主人公(A)は、エーミールの家に忍び込み、蝶を盗んだことを母(B)に打ち明ける。小説はここで終わるが、「母に告白した内容を想像し、具体的に書く。」】

A	エーミールの蝶を盗んで壊してしまった… (ここにせりふを書く)
B	よく言えたね。今夜はもうおやすみ。

生徒は、通常の国語教材の読後(学習後)感想より、意欲的に取り組んでいた。「この書き方のほうが感想を書きやすい」という声もあった。今回の課題設定場

面は、この小説のラスト部分であるが、それまでの部分を丁寧に読み取って書こうとしていた。そのため時間がかかってしまったが、「書く」学習として内容が深まった。次時に、「他者へ表現」として「ペアで発表」をしたが、自然に拍手があちらこちらで起こっていた。

感想文や作文となると、「文章力がないから…」と消極的になってしまう生徒が多いが、この学習は「会話文」になっているので、苦手意識が減少し、積極的に学ぶことができる。

「全体で共有しよう」の場面でも複数のペアが発表を希望した。あえて、いつも授業時には発言をしない生徒に発表をさせた。発表後の大きな拍手は感動的であった。「こういう学習を毎回したい」という生徒の声もあった。この教材は思春期の少年が主人公であるが、「生き方を考える」ことが主題の教材である。「ドラマエンパワメント」でこの教材を学ぶことで、生徒は自分自身の生き方に重ね合わせることができた。

私自身が中学校国語教諭のため、上記以外の教科での授業実践ができていないが、他の教科への実践も充分可能であり興味深いものがある。

この「ドラマエンパワメント」を、教師の研修会で「学級でいじめがおこった」をテーマに行ったり、「子育て」をテーマにPTA研修会で行ったり、「国際理解」をテーマに地域の人権学習会で行ったりと、大人向けワークとして10回以上実践をした。どの場合も、講師の話を聞く形の研修会より、内容についてより深く考えられ、自分自身がエンパワメントできたという感想を多くいただいた。

また、中学生だけでなく小学校高学年でも十分できる学習だと考える。

4. まとめ

「文部科学省が出した「論点整理」では、「アクティブ・ラーニング」は、①対話的な学び②主体的な学び③深い学びの3つの視点で整理されている。この中の「対話的な学び」に、「アクティブ・ラーニング」の一番の本質があると私は考えている。「対話的な学び」には他者が必ず存在し社会性が発生するからである。現代の子どもたちが身につけていく学びとしては不可欠なものである。このことにより、自らの考えを広げ深めることができ、「主体的な学び」へ、そして「深い学び」と発展し、生きる力につながっていく。

今回紹介した「ドラマエンパワメント」はまさに「対話的な学び」である。そして「主体的な学び」「深い学び」へと発展していくようすも、授業後の生徒の感想に表れている。未完の部分もあるがまだまだ発展していける学

習スタイルだと考える。ぜひ多くの先生に、この「ドラマエンパワメント」をさまざまな授業や学習で取り組んでいただきたいと思っている。単に、脚本づくりを授業に取り入れていただくと考えられるかもしれないが、「1・はじめに」で述べたように「自尊感情・自己肯定感」をベースに展開しているところがポイントである。これがあるから、生徒は自ら「主体的な学び」に向かい、「深い学び」へと発展していくのである。この学習スタイルを「ドラマエンパワメント」と名付けたのもこの意味からである。

今回報告した「ドラマエンパワメント」は、私が旭中学校で、国語教師として学級担任として取り組んだものである。当時は授業の中で、ワークショップとして取り入れていたが、今後は「アクティブ・ラーニング」という一つの授業スタイルとして、実践を進めていきたい。現在は、管理職のため、私自身が授業を担当することはあまりできないが、生徒が自分自身と学習をしっかりと結び付け主体的に学んでいく場に、自分も関わっていきたいと思っている。また、現在の勤務校が取り組む「アクティブ・ラーニング」として、「ドラマエンパワメント」を推進していきたい。